

日本におけるHIV/AIDSの言説と古橋悌二の〈手紙〉

竹 田 恵 子*

Dominant Media Discourses on HIV/AIDS in Contemporary Japan and the discourse of Teiji Furuhashi

TAKEDA Keiko

abstract

This paper investigates how HIV/AIDS and the “male homosexual” were represented by various Japanese media including interviews and autobiographies from the 1980s to the first half of 1990s and relates this to Teiji Furuhashi (1960-1995)’s discourse. Teiji Furuhashi, played a principal role in the creation of *S/N* — an influential masterpiece of contemporary performance art —, after he informed his friends about his HIV-positive status in October 1992.

Representations of HIV/AIDS in the media during the 1980s mostly concerned women, although “male homosexuals” were, nevertheless, supposed to be a “risk group”. The mainstream discourse also discriminated between those “guiltlessly” infected by blood products and those infected by sexual transmission, including “male homosexuals”.

“Male homosexuals” in gay magazines presented HIV/AIDS as their own problem and stressed that they should stop being promiscuous. They also thought that they could not reveal being homosexual, being HIV-positive or having AIDS and tried to pass for “normal” (i.e. straight and HIV-negative) in general social contexts.

In the 1990s, a small number of “male homosexuals” came out as being HIV-positive or having AIDS in the mass media. Similar to Furuhashi in *S/N*, they claimed that the problems posed by HIV/AIDS and the discriminatory treatment or erasure of “male homosexuals” were not created by themselves but by Japanese society. However, Furuhashi emphasized his “artist” identity, rather than that of “male homosexual” or “HIV-positive”. He intended to promote social change not by simply revealing his sexual and/or HIV-positive identity, but by creating his “art”.

Keywords : HIV/AIDS, Teiji Furuhashi, dumb type, “male homosexual”, social problems

1. 研究目的

1992年10月、現代美術作家の古橋悌二（FURUHASHI, Teiji 1960-1995）が、手紙により友人らにHIV感染を知らせた。このことがきっかけとなり、京都市左京区でHIV/AIDS¹をめぐる市民活動がはじまった。《S/N》に関するプロジェクト自体は古橋の手紙以前に発案されていたものの、ほぼ同時期に、この市民活動と相互作用を及ぼしあいながら創作されたのが芸術家集団ダムタイプ（dumb type）によるパフォーマンス作品《S/N》²

キーワード：エイズ、古橋悌二、ダムタイプ、「男性同性愛者」、社会問題

*平成19年度生 比較社会文化学専攻

(1994)である。《S/N》はAIDSやセクシュアリティを題材の一部として1994年に初演されたが、近年になっても注目されつづけている³。本稿の目的は、パフォーマンス作品《S/N》創作の社会的文脈を分析し、そのなかでの古橋梯二の言説の特徴を明らかにすることである。具体的には1980年代から1990年代前半までの日本の行政やメディアにおいて「男性同性愛者⁴」とHIV/AIDSがどのように語られてきたか分析を行い、1990年代前半の「男性同性愛者」自身の言説と古橋梯二による言説との比較を行ったうえで、古橋の言説の独自性を明らかにする。

2. 先行研究の検証および研究方法、研究対象

HIV/AIDSが日本の行政やメディアによってどのように語られてきたかという、HIV/AIDSの言説に関する研究は、人類学、社会学、保健社会学、メディア研究の分野で行われている。これらの先行研究（宗像 1991；宗像 1992；技術と人間 1992；池田 1993；宗像ほか 1994；Miller 1994；新ヶ江 2005；本郷 2007）のなかでも、セクシュアリティ／ジェンダー理論を用いてHIV/AIDSの言説編成を分析しているものは、とくに女性に焦点を当て、HIV/AIDSの言説編成にジェンダー不均衡といった権力関係を読み取った研究（Miller 1994）、「男性同性愛者」と公衆衛生の権力に注目した研究（新ヶ江 2005）が存在する。また、これらの言説に対する反応として「男性同性愛者」の抵抗を読み取った研究も存在する（Miller 1994）。本稿では、これらの先行研究の調査に加え、厚生労働省における「AIDS関連資料⁵」、「男性同性愛者」向け雑誌、新聞記事⁶、感染者/患者の手記（平田 1993；大石 1995）、古橋梯二が1992年10月に友人らにHIV感染を知らせた手紙（以下〈手紙〉と表記）（ダムタイプ 2000；佐藤（編） 2007）を一次資料として用い、言説分析を行う。

また、ここで研究対象である古橋梯二の経歴を述べておく。古橋は1960年京都市に生まれた。京都市立芸術大学美術学部の油絵専攻に進学し、後に「コンセプチュアル・アート、ビデオ、写真、パフォーマンス・アート、現代芸術評論を扱うコース」（古橋；ラトフィー 2000：120）である構想設計専攻に編入した。この専攻は国際的に知られるアーティストを何人も輩出しており、古橋が大学に在籍していた頃は森村泰昌が講師を勤めていた。指導教官はダダイズムの影響を強く受けた関根勢之介であった。

1984年には京都市立芸術大学生を中心とした「ダムタイプ」を結成、活動を開始する。在学中の1985年に東京国際ビデオ・ビエンナーレで奨励賞を受賞（古橋；クーパー 2000, 古橋；ラトフィー 2000）。1980年代後半からダムタイプとして、または個人で国際的な芸術活動を行いはじめ、1989年京都市芸術新人賞を受賞。この年から日本でドラッグ・クィーンとしての活動も行いはじめる。1994年8月に行われた第10回国際AIDS/STD会議（横浜）の関連企画としてダンス・パーティ「LOVE BALL」、ダグラス・クリンプや浅田彰を招いたシンポジウムなどをAPP（エイズ・ポスター・プロジェクト）の友人たちと計画するなど、精力的な活動を繰り広げ、1995年10月29日、AIDSによる敗血症のため死亡した（ダムタイプ 2000）。

3. 日本におけるHIV/AIDSの支配的言説

3-1. 「エイズ・パニック」と「男性同性愛者」の不在

日本では、1983年6月に旧・厚生省による「後天性免疫不全症候群（AIDS）の実態把握に関する研究班」が組織され、第1回班会議が召集されている（塩川 2004：49）。また、1994年9月28日には、旧・厚生省は新たに「AIDS調査検討委員会（班長 塩川優一）」を発足させているが、当時の一般社会におけるHIV/AIDSへの関心は高くない。ただし、行政により、当初から「男性同性愛者」は注射による薬物常用者らとともにハイ・リスク集団⁷とされている。しかし、「AIDS関連資料」にある「後天性免疫不全症候群（AIDS）の実態把握に関する研究報告書」において述べられていることからわかるように（「業務局ファイルNo.1」、p46）、米国に代表される海外の「男性同性愛者」は性的に放埒であるので感染の危険が大きいとされる一方、国内の「男性同性愛者」は性的におとなしいから危険性は少ないという構図が見て取れる。この構図は当時の一般メディアでも同様に見られる。

そのような状況のもと、1985年に日本のAIDS患者第一号として海外在住の日本人「男性同性愛者」が認定さ

れたが、調査対象の各紙においては、最小限の報道のみであった⁸。対照的に、「エイズ・パニック」と呼ばれる一連の報道の加熱、国民の大規模な反応を引き起こしたのは女性の事例である（池田 1993；Miller 1994、新ヶ江 2005）。

松本事件は、1986年11月に長野県松本市で性労働に従事していた出稼ぎのフィリピン人女性のHIV感染が明らかになったことがきっかけで起こった。松本市の歓楽街では客足が途絶え、当該地区の住民に対するいわれない噂やいじめが横行した（1987年2月9日 読売新聞東京朝刊）。神戸事件は、1987年1月17日に神戸で日本人初の女性AIDS患者が確認されたことを旧・厚生省が発表したことがきっかけで起こる⁹。この事件に関する報道は苛烈であり、女性の顔写真や実名の無断掲載、女性の身辺調査や火葬場の取材が行われた（池田 1993）。この女性は根拠のないまま「100人以上と性交渉をもった」、「売春していた」と報道された（1987年1月18日 読売新聞東京朝刊）。高知事件は1987年2月、血友病患者から感染したHIV陽性の女性が妊娠、出産したことがきっかけで起こった。ここでは神戸での事件のように実名の報道などはなかったものの、スキャンダラスなトーンであったとされている（池田 1993）。しかし、少なくとも筆者が調査した2紙のこの女性に対する表象は神戸での事件に比べて少なく、スキャンダラスなトーンでもない。これらの「エイズ・パニック」と呼ばれる3つの事件における女性の表象から見えてくることは、HIV/AIDSが「普通の」家庭とは関係ない海外から、「女性」を媒体として家庭内に侵入してきたという物語である。

しかし、これら女性のHIV陽性者の表象に比して、不思議なほど「男性同性愛者」の表象は少ない。AIDSとして認定された第一号の患者は海外在住の「男性同性愛者」と報道され、1991年までは男性同士の性行為による感染は血液凝固因子製剤（以下「血液製剤」と表記）による感染を除くと、新規感染者の要因の一位になっている（宗像ほか 1994：10）にもかかわらず、患者/感染者が確認され、報道されてもエイズ・パニックは起こらず、報道は最小限で事務的である。しかしながら、日本人の意識上、意識下において「男性同性愛者」に対する偏見や差別が強くあったことは以下の研究より明らかである。宗像恒次が1988年に実施した「市民のエイズに対する偏見的態度と感染者の生活の質」という調査研究では、東京都民に対するアンケート調査を行っているが、「男性同性愛者」に対する偏見と差別は深刻である。「男性同性愛者」のHIV感染者は「職を失うことがあっても仕方がない」と44%が思っており、16%が「死んでも仕方がない」と思っていることが明らかとなっている。また、ケースピネット法という手法を用い、女性同性愛者、男性同性愛者、血友病患者、異性愛者のAIDS患者に対してどのようなイメージを持つかという調査では、「男性同性愛者」に対する人格イメージが最も悪く、血友病患者に対する人格イメージを最も良いことが明らかとなっている（宗像 1991）。

3-2. 「良いAIDS」と「悪いAIDS」

女性とは異なった意味で「男性同性愛者」と対照的であるのは、血友病患者に対する比較的良いイメージである。事実、新聞各紙による血友病患者のHIV感染者/AIDS患者の語られ方は「無垢な被害者」という論調が中心である（例を挙げると1988年3月28日朝日新聞夕刊）。

ミラーは、このようなイメージに関して、血友病患者のHIV感染者/AIDS患者が国家の無関心と製薬会社の不正を暴く勇敢な正義の存在というイメージを獲得したことが要因であるとしている（Miller 1994：149-150）。ミラーの主張を裏付けるような言説は、1988年11月5日の朝日新聞朝刊の「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律（エイズ予防法）」案¹⁰に反対する「血友病児を持つ親の会」による以下のような言明に見られる。「私たちも、子どもも何も悪いことはしていない。輸入血液製剤の危険性を訴えたのに、国・厚生省は何ら耳を傾けなかった。国がその責任を認め何らかの救済をすべきだ」。

また、エイズ予防法では、血友病患者に対しては治療費・生活費補填のための「医薬品副作用被害救済基金」が提起されているが（池田 1993：120）、性行為による感染者には何の措置も取られていない。また、医師が多数の者にエイズの病原体を感染させる恐れがあると認める場合は、その旨並びに、当該感染者の居住地、氏名を都道府県知事に通報することが義務付けられているが、その対象から血友病患者ははずされている（PRC（患者の権利検討会）企画委員会・技術と人間編集部（共編） 1992：134-138）。

これらの点から、性行為による感染＝自業自得であるから仕方がない＝悪いAIDS、血液製剤による感染＝何も悪いことをしていない＝良いAIDSという差異が見られることが明らかである¹¹。このような両者の取り扱い

の差異は、社会における性労働従事者や「男性同性愛者」に対する排除、忌避感を増長させ、感染者/患者の潜在化を招く危険性が大きいといわざるを得ないだろう。

4. 「男性同性愛者」自身による反応—カミング・アウトとパッシング

以上、1980年代のメディアによる「男性同性愛者」を含む性行為による感染者と血友病者の語られ方の違いを見てきた。以下では、1980年代の「男性同性愛者」自身のHIV/AIDSに対する反応を見ていくこととする。一般の「男性同性愛者」向け雑誌『薔薇族』では1980年9月号という早い時期からAIDS特集を組んでいる。特集は「肉から愛の時代へ」と題されており、不特定多数との性行為をやめ特定の恋人を持つことの重要性を説いている。これ以降も『薔薇族』では自分たち自身の責任において性的に放埒であることをやめ、HIV抗体検査の重要性を強調していく。しかし、彼らの声は全国紙では取り上げられることはなく、血友病者と比べると声は大きくない。ただし、ミラーのように、この「沈黙」を「強いられた enforced」ものであると共に、「男性同性愛者」自身の「戦略的沈黙 strategic silence」であるとする視点も存在する (Miller 1994 : 130)。

1990年代になると、男性同士の性行為によるHIV感染者/AIDS患者当事者も、メディアに登場するようになってきた。1992年10月28日に平田豊¹² (仮名) が、「男性同性愛者 (ゲイ)」であり、AIDS患者であることを公表し (1992年11月10日発行 AERA)、1993年8月に同性愛者による活動団体「動くゲイとレズビアン会 (アカー)」に所属していた大石敏寛¹³が、HIV感染者であることを実名で公表している (大石 1995)。一方、『薔薇族』にも友人らと交流し、恋人を持ちたいと考える、非感染者と同様の生活を送る感染者像が提示されている。また、1980年代から継続してセーファー・セックスとHIV抗体検査の重要性を示し、自分たちがHIV/AIDSについて責任を持って対処すべきだという論調がみられる。しかし、同時に彼らの言説に特徴的な点は、自らがHIV感染者/AIDS患者であることも自らがゲイであることも隠さなければならないとしている点である。『薔薇族』1993年2月号には「エイズをみんなにうつして復讐してやる」と題された、HIVに感染して自暴自棄となった銀行員の手紙が公開されている。この記事には「口が裂けても自分がエイズキャリアだとは言えないのですから。発病を自覚したときにどうやって死のうか？」と、AIDSへの恐怖と不安が吐露されている。このことは、社会学者のアーヴィング・ゴフマンが論じたような、社会的に不利なアイデンティティ (identity) を付与されそうなることを回避すること (パッシング passing) (Goffman 1963=2003) といえる。

オックスフォード社会学辞典によると、アイデンティティ (identity) という語はもともと同一であること (sameness) および連続性 (continuity) を意味するラテン語 *idem* にルーツを持ち、その議論には古代ギリシア哲学からの長い歴史が存在する。人格の統合性と一貫性を示す概念としてはじめて使用したのはフロイト派の社会心理学者エリック・エリクソン (Erik H. Erikson) であったが、1960年代以降はエスニック・グループやマイノリティ・グループなどにも適用されるようになった (Anonymous 2009 : 293-296 ; Anonymous 1998 : 356-357)。本稿ではゴフマンの用いる社会的アイデンティティ¹⁴ (以下「アイデンティティ」と記述) 概念を用いることとする。本稿で言及するアイデンティティとは、社会が人びとを区分するカテゴリや属性を示す。よって、この世の他の誰にも該当しない当該人物独自の「個人的アイデンティティ」 (Goffman 1963=2003 : 93-110) とは区別される。

当然のことながら、全ての「男性同性愛者」または感染者/患者が他人に対してそのアイデンティティを表明 (カミング・アウト coming out) できる/しようとするわけではない。「男性同性愛者」自身がカミング・アウトを行ったために受ける不利益のほうが大きく、社会的偏見に対する解決策とならない場合があると述べていることが、先行研究により明らかとなっている (Miller 1994 : 120-122)。また、そのようなアイデンティティを持ってない/持とうとしない場合もあるであろう。

5. 古橋悌二の〈手紙〉—「アート」による社会への介入へ

次に、新聞記事や手記から読み取れる、カミング・アウトを行った「男性同性愛者」と古橋悌二の言説の比較を行う。

〈手紙〉の題名は「古橋悌二の新しい人生—LIFE WITH VIRUS—HIV感染発表を祝って—」であり、手紙の最後に「新たなる私」や「新しい自分の存在」と記していることから、過去とは異なった「新しい」自己というものが繰り返し強調されていることがうかがえる。〈手紙〉にはまず、友人らに今までHIV感染/AIDS発症を知らせていなかったことへの謝罪が書かれている。そして「私はこの告白によって今まではっきり形なかったあなたとの信じ合う関係を取り戻そうとしています」（古橋 2000：37）という箇所から、彼はこの〈手紙〉を送った友人たちと新たな関係を築こうと意図していることがうかがえる。続いて、肉親にはまだ言えずにいることを述べ、本当は友人らが信じる人以外には彼のHIV感染/AIDS発症の事実を言わないで欲しい旨が伝えられる。そして〈手紙〉の後半部分、とくに述べられるのは古橋の「アート」へのこだわりである。

次には、HIV/AIDSの社会的側面が示される。古橋は、HIV/AIDSの社会的側面が「余りにも大きい」（古橋 2000：41）ため、医師はその側面を引き受けられない、と言及した上で、その医師たちを「教育しなければならない」（古橋 2000：42）と述べている。この社会的側面とは古橋が「血友病患者のように血液製剤で感染したのではなく、欧米の殆どの感染者と同じくセックスによって、それも同性間のそれによって」（古橋 2000：41-42）HIVに感染したという点である。そして、この性に関する現実を「現代日本社会が覆い隠してきた」（古橋 2000：42）といい、「この現実を医師を含めた社会が見つめなおさない限り、彼らはこの病気について語ることはできない¹⁵⁾」（古橋 2000：42）と記している。この言葉を、3.で述べたようなHIV/AIDSの支配的言説と比較すると、興味深い照応が見て取れる。同性間の性行為による感染は、血液製剤による感染を除くと1991年まで新規感染要因の1位になっていたにもかかわらず、「男性同性愛者」は一般メディアには登場してしない。また、血友病患者と、性行為による感染者の扱いには明らかに差異があり、若い女性のセンセーショナルな例を除いて、性行為による感染については語られない。つまり、この点を指して同性間による性行為を含めた、性行為による感染を「現代日本社会が覆い隠してきた」と表現していると考えられる。しかし、HIV/AIDSに直面して、日本社会はその事実を否応なく見据えなければならなくなったというのだ。

また、HIVは「男と男のセックス、男と女のセックス、女と女のセックス、制度内のセックス、制度外のセックス」（古橋 2000：42）に関係なく感染するにも関わらず、それらを区別する「性のモラリティー」を「現代日本におけるもっとも醜い美学」（古橋 2000：42）であるとも述べる。以上のような〈手紙〉内の文章からうかがえることは、古橋が現代日本社会が覆い隠してきた性の現実と性のあり方に関する区別を、HIV/AIDSの社会的側面に結びつけ、しかもそれを自らの問題ではなく「社会の問題」であるとしている点である。この行為は社会学者のキツセラがいう「クレイム申し立て」であろう。「クレイム申し立て」とは、ある状態が存在すると主張し、それが問題であると定義する活動のことであり、問題の改善や解決を要求してある主体からほかの者に向けて表明される（Spector & Kitsuse 1977=1990）。古橋の語りと、前節で示した『薔薇族』に見られる「男性同性愛者」との言説を比較すると、後者では社会の偏見や差別はあるものとして、パッシングという手段で自らのほうを社会に合わせるやりかたであるが、古橋のほうは自分ではなく社会に問題があるとしている点が異なっている。

しかし、古橋はHIV/AIDSの問題を「男性同性愛者」のみの問題とみなしていないということも同時にうかがえる。「女性と女性のセックス」（古橋 2000：42）という言葉はレズビアンを暗示し、「制度外のセックス」（古橋 2000：42）という言葉は日本の法制度上婚姻できない同性愛者だけでなく、家庭外のセックスを担う性労働従事者やその顧客にも当てはまる言葉である。

古橋以外にHIV感染/AIDS発症を表明した平田豊と大石敏寛の手記（大石 1995；平田 1993）や関連新聞記事を調査すると、彼らも古橋と同様「エイズはエイズだけで存在しているのではなく、社会が作り出した差別・偏見を基盤にして存在しているのです」（大石 1995：220）という言説からもうかがえるようにHIV/AIDSを自分たちのみの問題として捉えるのではなく、社会的偏見や差別と結びつけていることがわかる。

また、大石と平田はHIV感染者/AIDS患者というアイデンティティを肯定的に捉えそれを表明する「カミング・アウト」を行っている。特に大石は手記の題名を『せかんどかみんぐあうと』としていることからもうかがえるように、「男性同性愛者」、「HIV感染者」というアイデンティティを非常に強く言明している。しかし、一方古橋は〈手紙〉において男性と性行為を行うとは述べているが「男性同性愛者」とは表現していない。代わって登場するのは「アーティスト」という言葉である。「アーティスト」たる古橋は、上に示したような性のあり

方を区別させているものを「現代社会を生きる人間にとって冒されざるを得ない精神の病巣」（古橋 2000：42）と呼び、その「精神の病巣」を治癒する手段として「アートは有効な手段と成りえる」（古橋 2000：42）と述べている。古橋は〈手紙〉において自らを「男性同性愛者」や「AIDS患者」というよりは「アーティスト」としているのである。

6. 結語

「男性同性愛者」は当初から行政、メディアによりハイ・リスク集団とされていたにもかかわらず、一般メディアのAIDSの言説にあらわれることは少なかった。またメディアでも法制度上も、「男性同性愛者」を含む性行為による感染者と血液製剤による感染者の取り扱いの差異が前者に不利な形で見られた。それでも1990年代前半から感染者/患者であることをカミング・アウトする「男性同性愛者」が出現しはじめたが、彼らはアイデンティティを強調し、言明していく一方、一般の「男性同性愛者」はパッシングの傾向が強かった。古橋も〈手紙〉においてある種のカミング・アウトを行っているのであるが、自らを「AIDS患者」、「男性同性愛者」と同定しておらず、「アーティスト」であるという言明を行っている。そして差別などのAIDSの社会的側面を十分に自覚し、クレーム申し立てを行う手段として「アート」は「有効」（古橋 2000：42）であるとしている。

まとめると、HIV/AIDSに関する社会的偏見に直面した「男性同性愛者」の対処方法は大きく三つに分類できる。まず第一に、自らが「男性同性愛者」や「HIV感染者/AIDS患者」であることを明示しないパッシングという戦略である。第二には、HIV/AIDSに関する偏見は社会の問題であるとした上で、以上のような「(社会的)アイデンティティ」を肯定的に受け入れ、積極的に明示する「カミング・アウト」という方法である。このようにスティグマを付与されたアイデンティティを掲げて行動することは社会変革に効果的だとされ、その戦略は欧米を中心に現在までに既に多く行われてきている。しかし、アイデンティティを提示した場合の問題も存在する。またそのようなアイデンティティを持ってない/持とうとしない場合もあるだろう。

第三の古橋の対処方法は、同時代の「男性同性愛者」の戦略と比較すると、HIV/AIDSに関する偏見は社会の問題であるとしている点で第二のカミング・アウト派と共通している。しかし、古橋の独自性はアイデンティティの表明ではなく、「アーティスト」として友人たちとともに「アート」を行うことにより、社会の問題点を解決しようとする志向性であると考えられる。

以上の点からもうかがえるとおり、古橋にとって「アート」が非常に重要な事柄であったことが明らかである。ただしこの「アート」が厳密に何を指しているのか、古橋の言説や具体的な作品から精査することが必要であろう。また、今後、古橋の「アーティスト」というアイデンティティは「個人的アイデンティティ」でもありと考えられるが、この「個人的アイデンティティ」と「社会的アイデンティティ」の関連を明らかにすることが必要であると考えられる。

7. 引用文献

Anonymous

1998 「同一性」 廣松 渉ほか（編）『岩波 哲学・思想辞典』東京：岩波書店：999-1000.

Anonymous

2009 "identity", Scitt, John ; Marshall, Gordon(ed.)Oxford Dictionary of Sociology(3rded.): New York: Oxford University Press.

古橋 悌二

2000 「古橋悌二の新しい人生—LIFE WITH VIRUS HIV感染を祝って」『メモランダム 古橋悌二』東京：リトルモア：36-43.

古橋 悌二；トリッピ、ローラ

1996 "dumb type/smart Noise", *World Art*, 2: 31.

古橋 悌二；ラトフィー、キャロル

2000 「1995年9月、キャロル・ラトフィーによるインタビュー」ダムタイプ（編）『メモランダム 古橋悌二』東京：リトルモア：106-135.

ゴフマン アーヴィング Goffman, E.

- 1963 *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall.
- 2003 『スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房.
- 平田 豊
- 1993 『ぼくのエイズ宣言 あと少し生きてみたい』 東京：集英社.
- 廣松 渉ほか（編）
- 1998 『岩波 哲学・思想辞典』 岩波書店.
- 本郷 正武
- 2007 『HIV/AIDSをめぐる集合行為の社会学』 京都：ミネルヴァ書房.
- 池田 恵理子
- 1993 『エイズと生きる時代』 東京：岩波書店.
- 石田 吉明
- 1993 『いのちの輝き エイズとともに生きる』 東京：岩波書店.
- 市川 誠一
- 2007 「わが国の男性同性間のHIV感染対策について―ゲイNGOとの協働による疫学研究をとおして―」『厚生労働省科学研究費エイズ対策研究推進事業 平成19年度研究成果等普及啓発事業 大阪地域における男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究成果発表論集』 財団法人エイズ予防財団.
- キツセ, J.I.; スペクター, M.B. Kitsuse, J.I.; Spector, M.B.
- 1977 *Constructing Social Problems*, Aldine de Gruyter.
- 1990 日本語訳『社会問題の構築 ラベリング理論をこえて』 村上, 直之; 中河, 伸俊ほか (訳), マルジュ社.
- 小出 五郎
- 1992 「メディアは何を伝えるか? エイズ情報におけるメディアの基本方針」『日本保健医療行動科学学会年報』 7, メヂカルフレンド社: 49-58.
- 厚生省保健医療局 結核・感染症対策室 (監修)
- 1992 『平成4年度版エイズ対策関係法令通知集 (エイズ対策必携)』 財団法人エイズ予防財団.
- ミラー, エリザベス Miller, Elizabeth
- 1993 *ABorderless Age: AIDS, Gender, and Power in Contemporary Japan*, Ph.D.Dissertation, Harvard University.
- 宗像 恒次
- 1991 「市民のエイズに対する偏見的態度と感染者の生活の質」『エイズジャーナル』 3(2): 201-212.
- 1992 「日本人のAIDS意識と行動に関するマスメディアの影響評価―マスメディア健康教育を考える―」『日本保健医療行動科学学会年報』 7, メヂカルフレンド社: 59-77.
- 宗像 恒次; 森田 眞子ほか
- 1994 『日本のエイズ』 明石書店.
- 宗像 恒次; 森田 眞子
- 1992 「HIV/AIDSのリスク行動と予防行動に関する研究」『日本保健医療行動科学学会年報』 7, メヂカルフレンド社: 189-211.
- NHK取材班 (編)
- 1997 『埋もれたエイズ報告』 三省堂.
- 日本弁護士連合会
- 1992 「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律案に関する意見書」 PRC (患者の権利検討会) 企画委員会・技術と人間編集部 (共編) 『増補改訂 エイズと人権』 技術と人間: 66-69.
- 鬼塚 哲郎
- 1996 「ゲイ・リブとエイズ・アクティヴィズム」『クィア・スタディーズ'96 クィア・ジェネレーションの誕生』 東京：七つ森書房.
- 大石 敏寛
- 1995 『せかんどかみんぐあうと 同性愛者としてエイズとともに生きる』 東京：朝日出版社.
- PRC (患者の権利検討会) 企画委員会・技術と人間編集部 (共編)
- 1992 『増補改訂 エイズと人権』 東京：技術と人間.
- 佐藤 知久 (編)
- 2007 『エイズと「私」をつなぐリアリティ 2007年度京都府エイズ等感染症公開講座』 京都, 大阪：京都府, MASH大阪.
- 新ヶ江 章友
- 2005 「日本におけるエイズの言説と「男性同性愛者」」『インターカルチュラル』 3: 100-122.
- 塩川 優一

- 2004 『私の「日本エイズ史」』東京：日本評論社。
総理府
1991 『エイズに関する世論調査』総理府。

8. 引用新聞・雑誌記事

Anonymous.

- 1987 「エイズ、家庭にも黒い影 風俗店検査に限界 神戸、パニック防止に懸命」『読売新聞』1987年1月18日東京朝刊。
1988 「エイズ予防法案の廃案を強く訴え 血友病児を持つ親の会」『朝日新聞』1988年11月5日朝刊。
1992 「「名乗りでるのも時代なんだよ、たまたま俺がいただけ」エイズ宣言」『AERA』1992年11月10日。

伊藤 文学

- 1983 「AIDSを日本に入れないために 肉から愛の時代へ」『薔薇族』128号, 1983年9月1日。

佐山 武

- 1993 「あの時、やめていれば・・・」『薔薇族』241号1993年2月1日。

注

- 1 AIDS (Acquired Immuno-Deficiency Syndrome後天性免疫不全症候群)は1982年9月に、アメリカ防疫センター (CDC: Center for Disease Control and Prevention) により名づけられた、HIV (Human Immuno-deficiency Virus ヒト免疫不全ウイルス) によって引き起こされる一連の症候群である。その後1984年までに感染経路が特定、検査方法が確立されている。AIDSは、現在は画期的な療法が発明されたことから慢性の趣があるが、かつて致命的な疾病であった。本稿で取り上げる古橋梯二が中心的な役割を果たしたダムタイプによるパフォーマンス《S/N》が発表された1994年当時、日本では抗HIV薬AZTやddIが認可されており、AIDSの発症を遅らせることは可能であった。しかし、人によっては激しい副作用をもよおすため、十分な治療とはなり得ておらず、AIDSを発症した場合、3年以内に死亡する例は75%であった (厚生省保健医療局 結核・感染症対策室 1992)。このような「AIDS=死」のイメージを根本的に覆すきっかけとなったのは1997年のHAART (Highly Active-Anti Retroviral Therapy 多剤併用療法) 導入による。なお、本文中、引用記事などにカタカナで「エイズ」と表記されている場合はそのまま記した。
- 2 《S/N》はパフォーマンス単体のみで成り立っているのではなく、CD、インスタレーション、ワークショップを含むプロジェクト名である。
- 3 例を挙げると、《S/N》は「2007年度京都府エイズ等感染症公開講座」で取り上げられ、2008年7月から10月に東京で開催された『トレス・エレメンツ-日豪の写真メディアにおける精神と記憶』と題された展覧会では、古橋梯二が制作したインスタレーション《LOVERS》と連動して上映された。また、2009年から2010年にかけて取り組まれているキングストン大学 (ロンドン) と京都精華大学 (京都) を中心にした共同研究プロジェクトにおいても取り上げられている。なお、《S/N》は現在も京都精華大学では定期的に上映されている。
- 4 ここでいう「男性同性愛者」は分析概念であることを明記しておく必要がある。新聞・雑誌記事では「男性同性愛者」は「ゲイ」や「おかま」、「ホモ」と表記されることもあるが、本稿では記事の表記の通りに記し、「男性同性愛者」という用語はそれらの総称として用いる。ただし、「男性同性愛者」自身にとって性行動と性自認は一致しない場合もあり、たとえ男性のみと性行為を行う男性であっても、自らを「男性同性愛者」と認識しないことがある。ゆえに「男性同性愛者」と同様の性行動がある者に対してただちに、研究者側が「男性同性愛者」と表記することには一定の留保が必要である。これらの点を考慮して、現在のHIV/AIDSにおける戦略研究においてはMSM (Men who have Sex with Men 男性と性行為を行う男性) というカテゴリを設けている (市川 2007)。
- 5 この資料は、1996年1月23日に当時の管直人厚生大臣が省内に「血液製剤によるHIV感染に関する調査プロジェクトチーム」を発足させ、そのときの調査によって見つけられ検察に提出、返却された「還付文書」のうちの一部である。本稿では特に、保健医療局のファイル5冊、薬務局ファイル2冊を調査した。このファイルは当時のHIV/AIDSをめぐる新聞・雑誌記事のコピー、国内外の医学雑誌のコピーを含み、当時の行政のAIDS対策を知る上で貴重な資料である。当該資料は厚生労働省大臣官房総務課情報公開文書室にて閲覧可能である。
- 6 とくに朝日新聞、読売新聞の記事を調査した。数あるメディアのなかでも新聞記事を主として調査した理由は、1987年と1991年の国勢調査において、HIV/AIDSに関する報道については96%以上がテレビから、80%が新聞から情報を得ているという回答が得られており (総理府 1991)、テレビ番組の分析についてはすでに先行研究 (宗像 1992) が存在しているからである。
- 7 [(1)男性同性愛者、注射による薬物常用者、有病地由来の血液製剤輸注者、および以上のものと頻りに密接な性的接触の機会があった者 (2)以上の配偶者 (3)AIDS流行地の外国人と頻りに密接な性的接触の機会があった者] (「後天性免疫不全症候群」(AIDS)の実態把

握に関する研究報告書：「AIDS関連資料」の「薬務局ファイルNo.1」 p55)

- 8 ただし、本来の第一号患者は、1983年にAIDSとは断定できないという診断が下された男性血友病患者（「帝京大症例」）であったことが、後に明らかになっている（NHK取材班編 1997：117-123；新ヶ江 2005）。この第一号患者の認定に関しては、明確でない点も多いが、本稿の趣旨と異なっていることから詳細には言及しない。
- 9 この事件をきっかけとして神戸市にAIDS相談窓口が開設されてから3日で相談者は3195人、血液検査を希望したものは1092人にのぼった（朝日新聞1987年1月21日夕刊）ことから、パニックの大きさがわかる。
- 10 この法案は一連の「エイズ・パニック」のすぐ後、1986年3月に旧・厚生省により要綱が発表された。その後1987年3月31日に法案が国会に提出され、1989年1月17日に公布、同年2月17日施行された。1999年4月1日「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の施行と同時に廃止される（PRC（患者の権利検討会）企画委員会・技術と人間編集部（共編）1992）。ところが、この法律の法案が国会に提出された時点で人権やプライバシーの観点からこの法案に問題があることが指摘されており、（日本弁護士連合会 1992）。さらにゲイ活動団体、フェミニズム団体、血友病患者の団体などが抗議を行ったにもかかわらず（鬼塚 1996；本郷 2007）、法案は可決された。
- 11 ただし、血友病患者による旧・厚生省と製薬会社を相手取った損害賠償請求、いわゆる「薬害HIV訴訟」の大阪原告代表の石田吉明氏は感染の経路が何であろうと同じ感染者/患者であることを述べている（石田 1993：121）。
- 12 1991年8月にエイズであると診断される。その後「エイズを考える会」代表をつとめた（1994年3月16日読売新聞東京朝刊）。平田豊という名前は家族の希望により実名ではなく、仮名となっている。
- 13 大石は同性愛者の活動団体「動くゲイとレズビアの会」に所属したことで徐々に肯定的なアイデンティティを持てるようになっていったが、1991年12月HIVに感染していることが明らかとなる。その後横浜で開かれた第10回エイズ会議ではPWA小委員会のスポークスパーソンとなっている（大石 1995）。
- 14 また、「社会的アイデンティティ」に関してゴフマンは、わたしたちが、当該人物の行為の予測から付与するもの、すなわち比較的他者から見て目に付きやすいアイデンティティを「対他的な社会アイデンティティ a virtual social identity」とし、一見しただけではわからないが、当該人物が求められれば明らかにできるようなカテゴリや属性を「即自的な社会的アイデンティティ an actual social identity」としている（Goffman 1963=2003：14-15）。管理/操作の対象になるのは、前者である。
- 15 当該部分の前部には「鬼塚さんが言うように」と記されている。鬼塚哲郎氏は古橋の友人であり、後にHIV/AIDS活動団体MASH（Men and Sexual Health）大阪の代表となっている。鬼塚氏は当時、エイズ予防法に反対するゲイ・アクティヴィストたちと交流があり（鬼塚 1996）、その鬼塚氏の影響を古橋は受けていると考えられる。